

シリア技プロ C/P の本邦研修を実施して

シリア国でおこなわれている「節水灌漑農業普及技プロ」の本邦研修として、シリア人カウンターパートの研修が10月3日から1ヶ月間実施された。これまでもカウンターパートに対する同様の研修は何回か実施されてきたが、今回はこれまでとは違う特別な状況あるいは想いのもとでおこなわれた研修だった。チュニジアからはじまったいわゆる「アラブの春」が、エジプト、リビアそしてシリアにも波及して、いまだにシリア情勢は混迷を極めている。そうした状況下で、ほんとうにカウンターパートたちは日本に来られるのか、と最後まで半信半疑だった。こうした特殊な状況下でおこなわれた今回の研修のコンセプトは、本来の目的である日本の農業や農業普及、研修などについて学ぶということに加えて、プロジェクト活動と密接にリンクした内容でプロジェクト活動を直接支援して、より活性化させるための研修にする、あるいは帰国後すぐに使えるような知識や技術を身につけるような実践的なものにするということだった。

今回の研修員は7名で、普及関係者4名、研修関係者3名あるいは中央省庁から3名、地方(県)から4名という構成で、男性5名、女性2名、年齢層も30代から50代までと、さまざまな意味でバランスが取れた組み合わせであった。研修内容は、研修員の専門性に合わせて、特に最初の2週間は日本の農業普及や研修事業、および農協や農産物直売場等の流通関係、さらには灌漑事業等の講義・見学などがおもだった。

今回の研修内容でこれまでおこなってきた研修と特に異なる部分は、プロジェクト活動に関する研修員と日本人専門家とが討議する時間を設けたことである。プロジェクトのおもな活動である試験研究及びデモ圃場、研修活動、普及活動について、日本人専門家がファシリテーター役を務めた。それぞれの分野について研修員側から現状の報告がされ、それにもとづいて現在の課題

や今後の方針等について活発な議論がおこなわれた。

さらに最終週である第4週には、これも新たな試みとして、研修ニーズに基づいて研修計画を作成するワークショップを2日間おこなった。ここでは研修対象者である灌漑普及員の役割認識およびその役割を果たすために必要となる能力を書き出す(Job Analysis)。そしてその個々の能力に基づいて個人および組織の能力評価をおこない、研修ニーズに基づいた研修計画の作成をおこなう、というものだった。研修員の反応は良好で、帰国後すぐ使ってみようという意見がおおく聞かれた。

ところで、日本でおこなう研修の意義としては、当該国にないものや最先端のものを日本で見聞するということもあるし、日本的なきめ細やかさ、時間や計画を守ろうとする姿勢、あるいは日本人の謙虚さ、相手を尊重する態度などを知ってもらうということもある。

今回の本邦研修においても、そういった要素は含まれていたし、さらにこのようなオフィシャルな研修を通して研修員たちに学んでもらうことに加えて、研修以外からもいろんな「日本」を経験して楽しんでもらうための「課外活動」も欠かすことができないものだった。秋葉原や浅草雷門、都庁展望台から大都会・東京を一望するなどの東京観光のほか、観光農園でナシ狩りやバーベキューをしたり、刺身や寿司、さらにはお箸を使うことにも挑戦したり、日本語入門コースも体験した。また家族、友人、知人へのお土産には、100円ショップのバラエティに富んだ品揃えに感動していた。

こうした日本におけるさまざまな見聞や体験が、現在のような困難な状況下でもシリア国でプロジェクト活動を継続させ、そこでがんばっているカウンターパートたちを少しでも元気づけることになったり、彼らが得たものを今後の活動に活用してもらえれば望外の幸せである。



農業改良普及センターの活動事例



研修計画作成ワークショップ



寿司、寿司、寿司・・・